

関西の僕らの運動の持っていた ささやかな質だと思いますけれどもね

—— 北摂ベ平連、梅田地下街フォーク集会、喫茶店フリーク、そして

語り手：坂本 洋¹⁾

元北摂ベ平連、元喫茶店フリーク店主

聞き手：植野 芳雄

元関西ベ平連、元ハンパク協会メンバー

番匠 健一

社会理論・動態研究所研究員

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

福井 優

立命館大学大学院文学研究科博士後期課程

大野 光明

滋賀県立大学准教授

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

2024年3月14日、坂本洋さんご自宅（番匠、福井、植野芳雄）

2024年8月29日、立命館大学梅田キャンパス（大野、番匠、福井、山本健治、植野芳雄、田口章一）

2024年9月23日、坂本洋さんご自宅（番匠）

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育センターでは、2018年から「反戦のための万国博」（通称「ハンパク」あるいは「反博」）に関する共同研究をおこなっている。1960年代後半、日本各地でベトナム反戦運動が起こるなか、関西では「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）とつながる地域ベ平連や、それらの共同行動の器として関西ベ平連が結成され、集会やデモが盛んにおこなわれていた。ハンパクは1969年8月に大阪城公園を会場に関西ベ平連、南大阪ベ平連が中心となって開催された。「人類の進歩と調和」をスローガンにした万博に対して、反戦文化を結集した民衆による独自の万博が目指された。

本稿は、ベトナム戦争の時代に北摂ベ平連として活動した坂本洋氏のインタビュー記録である。坂本氏は、同級生とともに「北摂ベ平連」を名乗り、伊丹空港に隣接する新明和工業のベトナム戦争協力に対して定期的な抗議行動を行うとともに、機関誌「北摂ベ平連ニュース」を発行した。また梅田地下街ではギターを弾き、歌い、フォークミュージックを通じた対話集会に関わった。ハンパクでは素材に

こだわったラーメン屋台で参加し、北摂ベ平連の定例デモへの参加を呼びかけ、最終日の御堂筋デモを経験した。その後は豊中駅前でロック喫茶フリーク（FREAK）を経営し、機関誌『フリークアウト』の発刊、音楽イベント「はみだしコンサート」を手掛けるなど音楽を通じて社会の変革を目指した。豊中市議会へ立候補し独自の選挙運動を行い、能勢では安全な食と米作りを通じた関係づくりを行い現在も継続している。

[] 内の補足は番匠による。



写真：左から坂本洋、番匠、福井、植野芳雄。
2024年3月14日、豊中市の坂本氏のご自宅にて。

農村地帯での幼少期

番匠：今日は坂本さんのライフヒストリーから、どういうふうに関わっていったかお話を聞かせてください。まず生まれは何年ですか。

坂本：1947（昭和22）年ですね。いわゆる団塊の世代のど真ん中ですわ。僕は本当の誕生日は1947年7月なんですけど、戸籍上は10月21日になっています。3か月ぐらいほっとかれたんです。神戸市の板宿に住んでいたけれども、普通の古い日本家屋で、妹が産まれる時に近所の産婆さんと呼ばにいったのは覚えている。私の母親の結婚相手が、離婚が上手くいかず、相手の奥さんからどなり込まれたりした。僕が6歳で小学校に行くくらい、妹が1歳になるくらいかな、その頃に神戸を引き払って母の出身に近い川西市の笹部に移った。農村地帯で、戸数は30戸ぐらいです。当時は妙見口路線だけですけれども、能勢電鉄の笹部駅があって、友達が来たら「なんやお前、この駅トイレみたいなやな」と言うほど、小っちゃな掘っ立て小屋でした。母は、父親と知り合ったときは看護婦だったけど、僕と妹が小さくて夜勤は無理やいうんで辞めて、その後は生命保険の勧誘とか、ミシンの販売とかを長くやってた。父親からの仕送りもなくて、母が単身で曾祖父と曾祖母を抱えながら我々2人を育てた。非常に苦労したと思います。

番匠：周りは全部農家ですか。

坂本：うん、周りはね。僕のところだけは違うたわけです。

番匠：お母さんのご両親はどうされたんですか。

坂本：母親の親というのが、当時別れていたんか、死んだんか、分からへんけれどもおらんねん。本当に周りが純農村で、田んぼの中にぽつんと家がある。そんな片田舎で大きくなっていくんですけども、高校ぐらいになったときにボブ・ディランに出会ってアメリカのフォークソングにすごく惹かれた。ちょうどその頃ベトナム戦争が激しくなってベ平連の小田実さんなんかが言うことにすごく共感した。そんな田舎で東谷小学校の僕の同級生の5人ぐらいで、いきなり北摂ベ平連というのをつくったんですよ。

番匠：小学校の同級生なんですか。

坂本：「5人組」とか言われていました。そんなんでいろんな活動をし出すから、もうそれは四面楚歌みたいな感じで。大学に入った頃に、1年生は一応ちゃん行ったけど、2年になる頃には僕が行っていた阪大の基礎工学部も全部封鎖されて授業がなくなる。その時に、池田市内で昼が傾いているような古い家の離れをとにかく安く貸してもらって、ガリ版で詩集や『北摂ベ平連ニュース』を出して、自分なりに反戦の活動というのをやっていた。

大阪国際空港（伊丹空港）のすぐ横に新明和工業があって、米軍機の修理をしていたんですね。それが豊中市内におけるベトナム戦争とつながるからいうんで、毎月デモをやって、それがベ平連活動の始まりみたいなもんです。その中で奥井保さんと知り合って、彼はギターを弾いてて、いわゆるフォークゲリラのはしりみたいな方ですけども、梅田の地下街にも行くようになった。僕は全くの素人なんですけれども、スリーコードだけでそういう反戦歌を歌うようになって、植野君とか関西ベ平連のメンバーとも知り合って、活動にのめり込んでいくわけです。

今の僕はすっかり日和見主義になってしもうてどうしようもないけれども、当時は自分でもほんまに真面目やったなと思います。僕は長男だし、一応大学まで行ったから、母親はもう全ての期待をかけていたんやけれども、それが途中でおかしくなってしまう。それは大変やったと思いますわ。

番匠：『北摂ベ平連通信』には笹部の住所が載っていますね。

坂本：当時は字みたいなもんで、川西市笹部字鳥田に北摂ベ平連の事務局を置いて、そこを宛先にしていました。

番匠：小学校の同級生5人で立ち上げたと言っていますが、どういうメンバーだったんですか。

坂本：今でもまだ同じ場所に東谷小学校というのがあるけど、1年から6年まで他は1組しかなくて、僕らの学年だけが2組あったんですよ。昭和22年生まれがい組、ろ組というのがあった。

番匠：坂本さん以外の北摂ベ平連のメンバーは、皆さん農家の方なんですか。

坂本：農家は1人だけかな。二反田君は印刷屋に早々と就職して自分で稼いでいて、僕らがフラフラしているときに、いろいろアルバイトを紹介してくれたり、面倒見てくれたんですよ。

番匠：小学校から仲よかった5人が中学校、高校と一緒にだったんですか。

坂本：僕は東谷中学校には行かなかったんですよ。母親が一心に期待をかけてたもんやから、池田市に住んでいる教会の牧師さんに身元引受人を頼んで、北豊島中学校に越境入学して、私立中学校に行く女子なんかと能勢電鉄に乗って通ってました。僕以外はみんな東谷中学校へ行った。そして僕は1963年に北豊島中学校から池田高校へ行った。

番匠：農村部と街の方は大分違いましたか。

坂本：それはもう全然ね。まず、僕の住んでいた東谷は、店が八百屋とよろず屋が合わさってたまに鶏肉も入る店が1軒、仕出屋さんみたいなのが1軒あっただけで、ほんまにお店ってないんですよ。子供が買い食いできるようなところが全くない。それこそ自転車で紙芝居屋さんがまわってきてお菓子を食べるぐらいで、僕なんかお小遣いももらえなかったから、紙芝居も盗み見るぐらいしかできなかった。池田市は当時からそれなりに都会やから映画館もあったし、映画の看板なんか派手で、子どもから見たら「ええっ!？」というような感じ。何もなかったところからいきなり都会に出てきて、外界の刺激にすごくびっくりしました。映画なんて見たことなく、二反田君に連れていってもらった任侠映画か浪花節ぐらいだった。「ウエスト・サイド・ストーリー」が、初めて見たまともな映画かな。それと、当時は中学校から英語が始まったんですよ。池田の北豊島中学校に行ってた僕以外の子は、進学校やっただけから小学校の頃から英語はそれなりに勉強してくるわけです。僕なんかは全然分からなくて、「自己紹介せえ」って言われて、僕が言うたら「マヨネーズって言うてる」いうて、えらいばかにされた。それぐらい格差がありましたね。

当時すごい人口爆発の時代で、僕がちょうど高校から大学の頃に川西の山が削られて団地になり、ゴルフ場になると風景が激変した。伊藤市長というの

が開発業者に学校や公共施設とかを義務づける条例をつくって有名になった。

番匠：60年代半ばぐらいですかね。

坂本：ちょうど東京オリンピックの頃ですね。川西から越境入学して北豊島中学校に通い、池田高校から一浪して阪大に入ったんですけども、ややこしいことになって結局は辞めてしまうわけです。母親はそこで全ての期待がついてしまった。どんだけ毎日毎日、母親とけんかしたか分からない。僕に全てをかけて裏切られながらも、今から思えばよう支えてくれました。全然金にならへんのに、北摂ベ平連の事務所を借りる口を聞いてくれたのも母親なんですよ。

番匠：そうなんですか。

坂本：保険の外交をやっていたから、知り合いの知り合いを通じて。ほんまやったら、「何をしようもないことをやってんの!」という話になったんやろうけど。一応僕が5人組の連絡先になっていたから、ベ平連の同級生の親からは、とにかく僕が「赤に染めとる」みたいな、石投げられる状態でした。

番匠：60年安保の記憶はありますか。

坂本：小学校の頃に安保反対のデモを小学校でまねして、「あんぱん反対」とかをやったのは覚えています。僕は、60年安保も65年の日韓条約も全然知らなかった。東京オリンピックはたしか高校やったような気がするわ。

植野：高校のとき大阪に聖火リレーが来とったもんね。

短い大阪大学のキャンパス生活

番匠：北摂ベ平連を立ち上げるのは大学に入ってからですか。

坂本：大学に入ってからです。1966年に浪人して予備校へ行ってたときに、ジョーン・バエズが阪大にきた。67年1月です。

番匠：これ阪大なんですか。

坂本：うん。浪人中に行って、その場で買ったのは覚えていますわ。

番匠：第三部で、高石ともやと阪大ニグロがそれぞれ歌っていますね²⁾。



写真：ソノシート『日米連帯平和集会の記録——ジョーン・バエズを迎えて』1967年1月29日夜、大阪大学講堂

坂本：阪大ニグロ、ニグロ研というのがありましたね。民学同（民主主義学生同盟）系やったかな。当時の阪大は民学同系が結構強くて、そういう人たちが張り合ってたんだかな。ジョーン・バエズをたしか平和の集いで呼んだんですね。ちょうどアメリカから始まったボブ・ディランやジョーン・バエズというのは、すごく意識的な平和活動をしているというので、『息子たち娘たち』³⁾ というアメリカの16ミリの映画が67年ぐらいいにあった。『いちご白書』⁴⁾ なんかの前です。やっぱり西海岸の自由ななかで反戦の意識がちょっと芽生えてくるような感じでした。その流れでジョーン・バエズも来て、フォークが政治と絡んで、ベトナム反戦の大きなシンボリックなものだった。いうたら人集めですけれどもね。

番匠：大阪大学に入学されて、いろんなセクトの勧誘もあると思うんですけども、あえて小学校からの同級生たちと北摂ベ平連を立ち上げていくというのはどういう流れですか。大学の雰囲気なんかも含めて教えていただいてもいいですか。

坂本：大学は入ったんですけども、まだ母親の支配下にありましたから。母親は、中学でも高校でも「あんたこのクラブに入りなさい」と、全部決めてしまってたんですよ。

番匠：部活は何だったんですか。

坂本：中学は、バドミントンかな。要するに、あま

り勉強の差し支えにならないような軽いところに行きなさいと。オリンピックなんか見てると実際はすごいハードなスポーツなのにね（笑）。高校は、文化部で地理と歴史の地歴部というのがあって、そこに入りなさいと。地歴部に入ったけれども、ソフトボールばかりやっていました。その頃は、まだ全くのノンポリでしたから。何とか一浪して大学に入ったんですけども、大学で地理と歴史のクラブに入ったら、クラブハウスのなかは中核派のアジトやったんですよ。何も知らないノンポリやから、その連中にとって全く赤子の手をひねるようなもので、コテンコテンにやられた。ちょうど学内でも闘争がややこしくなってきた、外の世界の方がいろいろ騒がしくなった。そうそう、羽仁五郎が阪大に来たことがあるんですよ。

番匠：『都市の論理』の。

坂本：むちゃくちゃ有名人ですけどもね。みんな講演を聞いた後は、みんな涙でぼろぼろになってね。「この後デモに行かなあかん」いうて、講演に来たやつが阪大からみんな続々と出て、大阪空港と新明和にデモに行った。クラブハウスでは中核とか、友達では共産黨員とか、思想的にしっかりした連中からボロボロにたたかれて、そんな中で羽仁五郎にホンマに目からウロコが何枚も落ちるような形で言われて、こんなことをやったらアカンと頭が変わっていく。大学は封鎖されてしまうし、僕はちょうどその時に、小田実さんらの呼びかけで街に出て北摂ベ平連をつくった。だから大学ベ平連じゃないんですよ。阪大ベ平連というのが後にできるんですけども、そこじゃなくて北摂ベ平連をつくって、この北摂地域で大阪空港と新明和のベトナム戦争加担の問題をやっていたこうとした。

番匠：ちなみに、阪大で勉強はどうだったんですか。

坂本：基礎工学部やったけど、無理して入って勉強もせんかったから、1年の教養でもう全然ついていけませんでした。

番匠：キャンパスは石橋ですか。

坂本：石橋です。石橋の豊中キャンパスに羽仁五郎が来て、みんなでデモに行った。

番匠：それが1年生のとき。

坂本：1年の終わりやったと思いますね。2年は大学も授業がなくなっているし、北摂ベ平連をつくって外に出て、ちょうどフォークなんかで勢いに乗っていたから、奥井さんと一緒にいろいろ歌い出したとかね。ちょうどその頃にハンパクの動きもあった。

番匠：大学でいろいろ新しい友達もできて、政治的なことをよく知っている人もいるなかで、地元の友達とベ平連をつくったのはどうしてですか。

坂本：大学にあるのはみんな組織ですよ。中核派の組織もあったし、原理研みたいなものもあったし、みんな組織ですよ。当時はまだ阪大ベ平連というのはなかった。やっぱり小田実の言うように街に出て、そこで「市民」として活動する。市民という概念が当時、僕が大学に入った頃は全然学生の間にも知られていない。集会の冒頭あいさつがパターン化されててね、「本日の集会に結集された労働者・農民・学生・市民のみなさん」って、我ら市民はヒエラルキーの中で最下層。でもその市民が、どこにも属さずに誰にも言われることなく自分たちで考えて、あかんことはあかんと言うていこうという新たな論理というかね。

鶴見俊輔さんもずっと書いてますけれども、組織の論理でマルクス・レーニン主義がどうのとか、共産党宣言がどうのとかじゃなくて、市民の立場で今起こっていることに対して自分の身の回りのできることから始めようというのがすごく新鮮やった。僕にとっては身近なところに大阪空港と新明和工業があって、それに抗議をするために、阪大の中でやるよりは出てやろうという。阪大はもう当時、みんなセクトのたまり場になっていて、研究室やら何やらも全部占拠されていましたからね。

番匠：小田さんとの出会いはどういう形ですか。まずは本でしょうか。

坂本：本ですね。ベトナム反戦の時代に、小田実さんの何に惹かれたのかな。後から何回か会うたり、家にも行ったりしましたけれども、当時は直接会ってどうのこうのじゃなくて、やっぱり小田さんたちのベ平連宣言ですね。誰でも言い出しっぺが1人でも始めるのがベ平連やというんで、上下関係はな

い。だから関西ベ平連っていうのがあるけれども、別に関西ベ平連が上部組織で我々が下部組織というんじゃないくて、関西ベ平連もあるし、北摂ベ平連もあるし、南大阪ベ平連もあるしというそういう横のつながりというのがね、すごく新鮮やったんですね。そういうのが既存の組織には全くないですからね。セクトっていうのはみんな縦ですから。

やっぱりヒッピーとかあの辺に憧れていましたからね。後で有名になるジェリー・ルービン⁵⁾というのがいるんですけどもね。ピンポン外交で、後で北朝鮮に行ったりしたヒッピーの元祖がいたんです。その後に、小田実さんの思想にすごく惹かれて、自分の住んでいるところでベトナム反戦をやろうと普通に思ったわけですね。それが東谷からの5人の仲間と、池田とかそのエリアの中で知り合った何人かと一緒になって、その後に植野君とか、なんだいべ（南大阪ベ平連）の吐山君⁶⁾とかとも知り合って、関西の動きの中で活動していくということですね。

北摂ベ平連の立ち上げ

番匠：北摂のベ平連ができてくる流れとしては、坂本さんが東谷と一緒にだった同級生や北豊島中学・池田高校のご友人に声をかけられたのでしょうか。

坂本：そうです。別に積極的に声かけてどうのというのはなくて、最初の5人が集まって何かやろうという中で、友達が友達を連れてきたりとかして。そんなたくさんいませんけれどもね。だから毎月1回、日曜日に新明和にデモするということを呼びかけて、そこに集まってきた人たちとまた一緒にやり出すという流れでしたね。

番匠：なるほど。

坂本：1回目のデモはいつやったかもう覚えがないけれども。

番匠：坂本さんから鶴見俊輔さんに宛てた手紙が、立教大学の『北摂ベ平連ニュース』のファイルにありました。

「新明和伊丹工場（豊中市麻田）の米軍機修理は7月をもって終わります。ベトナム戦争の敗北をもって撤退をよぎなくされた米軍と運命を共にして

きた死の商人＝新明和も、もはやこれ以上甘い汁をすい続けられなくなったわけです。[北摂平連は]1968年7月20日に始まり、9月8日の第1回定例デモも[1971年]7月11日の第35回をもって一応終わりたいと思いますがお知らせします」⁷⁾とあります。

坂本：全然覚えてない。一応、『北摂平連ニュース』というのは出してたんですけども。

番匠：鶴見さんへの手紙では、1回デモは1968年9月8日とあります。東谷小学校の5人で始めたんですか。

坂本：5人だけだったわけじゃなく、知り合いとかも入れて、何人かで豊中駅前人工広場の下に座り込んだりしました。豊中駅近くの稲荷山公園に集まって、そこから豊中駅を通過して新明和までデモしたんですね。後でそこを使えなくなったんで、大曽公園というところに移った後も月1回のデモは続いていました。

番匠：北摂平連の話をもう少し聞きたいんですけども、5人組はどういう方々だったんでしょうか。

坂本：同じ小学校の仲のよかった同級生ですね。一番仲のよかった中島太一郎君というのがいて、彼はまだ存命やと思うんですけどね。中島君というのが僕は小学校の親友でして、吹奏楽部にいたので楽譜も読めるしギターもうまいし。ただ彼はあんまり梅田地下街で歌ったりはしませんでしたけど。彼とあと二反田明君と上田寿春君がいました。上田君が農家の息子といえは息子ですね。あと池田一男君、この5人です。あと女性の知り合いで、フォークと一緒にやってくれた人もいました。5人で始めた時は男ばかりですね。

番匠：会議みたいなのがあったんですか。

坂本：もう時効の話やけれども、当時みんな貧しかった、ちょうど中島君が中学校の宿直のアルバイトをやっていた。そこに夜になったら僕ら入り浸って、話をしている中でできたような気がしますね。

番匠：地元で集まる場所もないから、友人が働いている中学校に集まったんですか。

坂本：東谷中学校の宿直室やったと思います。夜は先生もみんな帰ってしまうしね。あとは僕らが入り

浸って、そこでいろいろ話したりしても、別に問題にならなかった。

番匠：どういう話があったんですか。

坂本：やっぱり小田実さんの自分の身近なところにあるベトナム反戦ということ話をしているなかで、たまたま大阪空港や新明和というのが我々の近くにあるやないかとなった。当時は大阪空港の騒音問題もあったんです。

番匠：二反田さん以外は大学生だったんですか。

坂本：大学生ですね。みんな大学に一応行っていましたね。上田君はたしか立命やったと思うけれども。中島君も立命やな。末川博さんがどうのいう話をして、当時は末川さんというのは神様みたいな感じでした。池田君は関学やったかな。

植野：関学やね。彼は日本史学科やと思う。

坂本：彼が部落解放同盟と関わりがあって、僕らの知らないことも彼から教えてもらうたりした。けれども彼のお母さんから、僕がそういう道に引っ張り込んだってホンマによう怒られた(笑)。

番匠：それぞれのお母さんがみんなを知ってて、怒られるんですか。

坂本：やっぱり閉鎖的な田舎ですから、それは後ろ指をさされて、「あそこの息子は何をしとんねん」という話ですよ。別に過激派と違くて、僕らは非暴力直接行動やから、デモはするけれども、一切ヘルメットもかぶらないし、石も投げないし、ゲバ棒も持たない。一番後ろの落ち穂拾いで、どこにも入るところのない人に一緒に入りましょうという。小田さんもやっていましたけれどもね、僕らは石やゲバ棒を持たへんけれども、花を一輪持って、それで参加しようというようなフラワーデモみたいなのもありましたね。

番匠：大きなデモがあるときは、一番後ろで。

坂本：東京のような超過激派がおるわけじゃないから、おとなしいもんですけれども。それでもデモに入ったことのない人にはね。ただあの当時、「みんなデモに行こう」というのが、そんなに違和感なかった。今みたいに政治に関わるのがすごいハードルが高いとか、そんなん全然なかったから。政治のことを喋ったら、今やったらみんな引かれてしま

うとか言うけれども、当時の雰囲気としては、政治のことも喋らんようなやつはアホ違うかみたいな、そんな雰囲気がありましたからね。現実の中核や共産党やらから、僕なんかはくそみそにやられたけれども、みんなが政治のことにこれだけいろんなことを思っているんやから、自分で考えんとあかんし、考えたらやっぱり今のあれはおかしいわなという話になる。みんなやっぱり純粹やったんでしょね。世の中にそんなに染まってなくて、やっぱりあかんことはあかんと言っていこうという。

番匠：北摂の活動が活発になっていくのは、大学封鎖と軌を一にしてですか。

坂本：そうですね。

番匠：北摂の第1回の定例デモが1968年9月8日とあったんですけれども、小学校での話合いから最初の行動へすぐ行ったんですか。

坂本：事務所がその時期にできて、とにかくデモをやろうというので始めたような気がしますね。池田の事務所は、今のダイハツ本社の割と近いところにあったんです。今はカップヌードルミュージアム大阪池田がそこにあるんですけれども、NHK連続テレビ小説「まんぷく」の安藤百福さんの辺りですね。

番匠：なるほど。最初に事務所をつくったんですね。

坂本：うん。母親がそんなんするんやったら、反対やけれども、頼んであげるからここにしとき、みたいな話やったような気がするね。古い家の離れを貸してもらって、そこで話をしたり、ゼッケンを作ったり、通信を作ったり。その事務所ができる頃には友達が友達を引っ張って来たり、十数人ぐらいいたような気がします。僕が行った池高の知り合いも何人かいました。

番匠：作っていたものはゼッケンとビラですか。

坂本：ビラ、通信ですね。『北摂ベ平連ニュース』というのを作って、後になると歌集づくりですね。それが収入源みたいなもので。

番匠：ガリ切ったのはどなたなんですか。

坂本：僕が主にガリ切って、刷ってました。

番匠：それはどこで覚えたんですか。

坂本：いや応なく。その謄写版いうのも当時ね、母に無理言うて、金出してもらって買うたような気が

します。

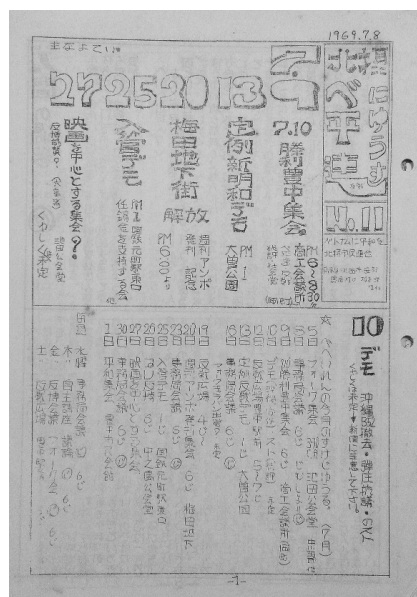
番匠：お母さんに出してもらったんですか。

坂本：その辺は僕のおかしなところでね。母親のことを無茶苦茶けにしてくせに、さすがところはさすがにいたりしてね。当時としては2万ぐらいかな、結構しっかりしたものでした。別に今でいうたら全然高くないけれども、当時の僕にしてみたら小遣いなんかない中でやから、それも出してもらったん違うかなと思うけれどもね。謄写版で刷るわけですけども、謄写版の印刷というのは本当に慣れで、大学のセクトはうまいことやるわけですよ。そんなん見て、自分なりに工夫して、僕も結構うまくなりましたよ。1人でゴムでつって、押さえてやって、すっと指にサックをはめて抜き取ってね。ぱっぱっぱっぱってやっていくという。結構速くやれるよ。

植野：山本さんがむちゃくちゃうまかったからね。ガリの文字がうまいんですよ。升目の中にちゃんと文字を書きはるんですよ。

坂本：そやな、あの人は。やっぱり当時は今みたいなコピーも何もないからね。だからガリ版と鉄筆でガリガリ切って、カットなんかもそんなんやってという。やっぱり手書きの文字やから、きちっと綺麗な字を書かないと、読めへんわけやからね。

北摂ベ平連の初期の活動



写真：『北摂ベ平連ニュース』No.11、1969年7月8日

番匠：初期の活動というのはやはり新明和と伊丹空港ですか。

坂本：主にその2つをやっていましたね。月1回の月例デモでもう精いっぱいでした。継続は力いうけれども、続けるのは物すごい心理的負担なんですよ。誰もけえへんかも分からへんけれども、それはやり始めた以上、やらなきゃあないからいうので、すごい重荷の中でやっていたような気がします。

番匠：当時は電車で通勤している人たちから新明和とか、例えば米軍機なんかが見えたわけですか。

坂本：直接はなかなか見えなかったと思いますね。それを見張りに行こうという人が北摂平連でも後で加わった人の中にいました。夜間に監視に行くとかいってね。

番匠：米軍機は飛んでくるんですか。

坂本：修理のために新明和に運ばれてくるわけですよ。飛ばれへんのもあったんかもしれへんけれどもね。基本は飛んできてそこで修理されてというようなことやったと思います。

番匠：飛んでいくのが見えるわけですか。

坂本：結構そばに行かないとなかなか見えません。今ちょうど伊丹空港の滑走路が見えるところがビューポイントになって、あそこに張りついてカメラ撮っている人がたくさんいますけれども、当時はそんな感じではなかった。

番匠：デモをかけにいったら、横須賀みたいな感じで修理中の米軍機が並んで見えるみたいなことはありましたか。

坂本：新明和工業の正門みたいなところまで僕は行くんですけど、正門はもちろん全部網と柵で囲われて、その先は入れへんようになってました。ちょうど正面の先に大きな建屋みたいなものがあって、直接滑走路とかは見えないんですよ。一応、そこまで行って抗議の声を上げて引き返すという形でした。

番匠：モノとしては見えないんですね。

坂本：直接は見えなかったですね。でも、米軍機が運ばれるというのは新聞報道なんかでたまに出たりするんです。当時やっぱりベトナム戦争でいっぱい沖縄から運ばれてきたりとかいうのがあったんで

しょうね。修理が沖縄でできないものはこっちに回されてたように思います。

フォークミュージックと反戦文化

番匠：フォークについても聞きたいのですが、先ほど阪大にジョーン・バエズが来たお話がありました。

坂本：その前からフォークのことにすごく気になっていた。

番匠：高校のときからですか。

坂本：予備校のときになるのかも分からへんね。

植野：その頃は試験は3月3日でしたからね。

坂本：ジョーン・バエズが来るいうんで行ったんやろうな。

番匠：それは試験頑張らないといけないですね。

坂本：そうやね。僕らの当時としては、やっぱりボブ・ディランとジョーン・バエズというのは神様みたいな感じでしたからね。

番匠：音楽への感性は、もともとアメリカのカントリーとか好きだったんですか。戦後、日本のウェスタンなんかもあったと思いますが。

坂本：ビートルズ世代ですから、中学校の頃はもうビートルズに完全にのめり込んでいましたね。ラジオの民放でリクエスト番組とかね、ポップスがよくなるわけですよ。そういうのに一生懸命投稿しました。当時東京オリンピックの頃にはテレビはもう各家庭に入っていたと思うけれど、こういう歌はほとんどラジオのリクエスト番組でした。あと、高石ともやが歌を日本語に訳すようになって、すごく興味深くなっていました。その頃に高石ともや⁸⁾が池田市に来て、池田市役所の隣にあった建て替え前の古い商工会議所でフォークコンサートをやったんですよ。その頃すごくのめり込んでたから、そこに行ったのは覚えています。レコードにサインしてもらいましたよ。

番匠：それは高校生のときですか。

坂本：高校生の頃になるのかな。高石ともやにアコがれて、自分でもそのまねをしだすわけです。スリーコードでできるようなものを、自分でもポロポロやりだして。

番匠：坂本さんの周りで高石ともやを聴いてる人は

いたんですか

坂本：そんな全然マイナーですよ。でも「受験生ブルース」は受験生のペースとかをうまく歌っているというので、それなりにヒットしましたからね。彼のレコードは全曲日本語で歌っていて、「死んだ男が残したものは」⁹⁾とか、「戦争の親玉」¹⁰⁾とか反戦歌もある。その時ちょうどベトナム戦争で僕らにとっても大きかってんね。その時小田実とも出会うわけですけど、ベ平連の呼びかけって「ベトナムに平和を」「ベトナムはベトナム人の手に」、も一つが「日本政府はベトナム戦争に協力するな」という3原則で、フラットな関係で、誰でも言い出しっぺが自分で名乗ったらベ平連やと。それまでの代々木や反代々木や、セクトやなんやらとはまったく違う、ノンポリでなんも知らん若造にもすごい魅力的に見えたわけです。

ちょうどビートルズで始まって、そのうちにフォークソングが出てきてボブ・ディランにのめり込んで、分からんなりに英語の歌を聞いてたけれども、それを高石ともやや中川五郎が訳して歌い出した。やっぱり英語でそのままやったって通じひんからあかんのですよ。「We Shall Overcome」ぐらいやったら分かるけれども、やっぱり日本語の歌詞にしてくれたのがすごくありがたい。メッセージソングは聞いて分からなあかんわけやから、それを始めた高石ともや、中川五郎、岡林信康はやっぱりすごく大きかったと僕は思ってます。

日本人で当時英語でブルースをやっている人を僕はあんまり好きじゃなかったんですね。オーイェイ言うてるだけで、全然大した歌詞じゃない。女に逃げられたような話ばかりや。だからメッセージソングというのがすごく当時の僕なんかの心を捉えた。

番匠：その時代のなかでフォークの音楽自体に自然に入っていたと。

坂本：ビートルズを聞いているうちにだんだんと、こんな歌もあるみたいな感じでね。それから僕は実はピート・シーガーなんかはほとんど知らなかった。後で知りますけれどもね。やっぱりボブ・ディランとジョーン・バエズというのが、ベトナム反戦運動の中でも出てくるわけですね。それに感動した。

番匠：ノンポリながらも、歌としてはプロテストソングを先に受容していた。

坂本：そうですね。相乗的ですけども、そのあたりで小田実さんが自分の身近なところのベトナムをという。だから直接、米軍機が見える見えないじゃなくて、大阪空港にベトナム戦争で爆弾を落としてた飛行機が運ばれてきてそこで修理されている。そういうのはやっぱり身近なベトナムやから、やっぱり許せない。そこで行われていることに自分はどんなやと。

番匠：当時の曲の覚え方として、最初に坂本さんがコピーしたのは誰だったんですか？

坂本：ディランの「風に吹かれて」かな。もちろん自分で弾いてたのは、アメリカンフォークだったと思う。

番匠：楽譜集みたいなのが出てたんですか。

坂本：要するに大学生の軽い感じのフォークグループ向けみたいな『アメリカンフォークソング』というのがあって、歌詞とかコードとかが書いてあった。簡単な曲だったら、ディランの曲でもコピーして歌ったりできますよね。梅田地下街で歌うときに、外国の曲をそのままやってもしょうがないので、中川五郎や岡林信康が日本語で歌ってくれているものをコピーした。日本語の歌をコピーするというのは岡林信康の影響が大きいんですよ。「友よ」って、圧倒的に有名やったし、あれ簡単なんですよ。スリーコードで誰でも弾けるし、皆で歌えるし。

番匠：「風に吹かれて」も簡単だったんですか。

坂本：「The answer is blowin' in the wind」で「その答えは風に吹かれている」と、それこそ高校生ぐらいの英語の理解力でもできますよね。コードも簡単やし、日本語にしてすぐ歌えるというのがありましたよね。

番匠：「風に吹かれて」って面白いですね。いろんな人が自分なりの日本語にしている。片桐ユズルさんの詞が有名だったと思いますが、みんなそれぞれが対抗して自分で翻訳していて面白い。

坂本：あれだけ簡単なフレーズで、でも深く考えればなんぼでも掘り下げれるっていうのがね。ディランが持っている詞の力、言葉の力というのが根本に



写真：梅田阪急前（地上）のフォークによる対話集会、
1969年、坂本氏所蔵、ギターを持った人物の右から山本整、貧苦（百谷峰直）、坂本洋、二反田明

あるんでしょうね。僕らは全然そこまではわかりませんが。でも最後に「風に吹かれている」っていうのは、どれだけ人が死んだら、どれだけ歩いたら人は大人になれるとか、それなりに考えればナンボでも深く読めるから。それまでの当時の日本の音楽事情は、もともと演歌しかないようなところに、フォークソングやいうて「バラが咲いた」が出てきたくらいで、一方で外国の直輸入でビートルズとかグループサウンズが出てきて、日本語の歌詞も出てきたけど、とてもやないけど、僕らが聞いてわあすごいなと思う歌ではなかったわけです。だいたいグループサウンズ言うのが日本の歌謡曲の延長でしたからね。そんなもん梅田の地下街の人前で歌えるような歌ではない。

番匠：それは歌詞がという意味ですか（笑）。

梅田地下街の対話集会とフォークミュージック

坂本：北摂ベ平連は、池田市に事務所があったんですよ。池田市の職員組合があって、その組合専従の奥井保さんが僕らより5歳ぐらい上だったかな。当時、僕は金のない食い詰めた、思いだけはあるような20歳前後の青年やって、奥井さんと何となく交流ができて、とにかく物心両面でお世話になったんですよ。僕なんかもほんまの貧困の中にずっとあって、母子家庭でむちゃくちゃしてて、親不孝の極みなんですけれども。奥井さんはフォークがすごく得意やったんですね。

番匠：どんな方だったんですか。

坂本：もともと歌声とか何かやってた人だと思うんですけど、フォークソングがブームになって、もっとプロテスト性の強いボブ・ディランなんかの影響を受けた人です。高石ともやなんかはその典型ですけども、ボブ・ディランとか、ピート・シーガー

とか、古い労働歌や人民の歌をコピーだけでなく、自分なりに訳して歌い出したんですね。僕らもそれに触発されて、日本語の歌を奥井さんたちと一緒に梅田の地下街で歌うようになったのが、関西のフォークゲリラのきっかけみたいなものでしたね。

番匠：奥井さんはそこにも関わっておられるんですね。

坂本：奥井さんが最初始めたみたいなおもんです。もちろんベトナム反戦ということがあったんですけども、ちょうどその後、南大阪ベ平連と関西ベ平連が中心になって、「反戦のための万国博」をやるということで、その宣伝の意味も含めて梅田の地下街で歌い出したというのはある。普通のデモとか集会だと関西ベ平連のヤマケン〔山本健治〕¹¹⁾が挨拶をするけど、梅田の地下街でいきなりヤマケンがしゃべり出してもなかなかしんどいので、奥井さんなんかが高石ともやとか中川五郎の歌をやりながら、その合間にヤマケンがスピーチするみたいなスタイルでやり出した。南大阪ベ平連の吐山君とか利光君なんかも来て、その現場に中川五郎とか岡林信康なんかも来てね、その輪が広がっていった。68年の暮れから69年にかけてぐらいかね。

植野：69年にハンパクをやっているから。

坂本：あの当時は、今みたいなきれいな地下街はできてなくて、ものすごく狭い阪急と阪神の通路に曽根崎署があって、ずっと西梅田のほうに続いている。西梅田のほうは暗い地下道でね、両側には壁に引ついたような土産物売場みたいなのがあったんですよ。

植野：各都道府県の土産物のコーナーがあったり。

坂本：旅行に行った人が別に現地で買わなくても、そこで買って持って帰る。ホンマに狭いところやった。そのピアノの横幅ぐらいの店なんや。そこが土産物売場で、道路が交差するあたりがちょっと広がってた。梅田で僕らが歌っていたところは柱が何本かあって、その辺りに地下鉄とか市バスの回数券売りのおばさんたちがいて、11枚つづりの回数券を切り離して売りはるわけ。それが商売になっていた。おばさんたちの間に紛れて、僕らは歌を歌いながら、時々ヤマケンがしゃべるような形で宣伝をしていた。

ちょっとずつ輪が広がっていった、僕らは当時の歌集をガリ版で印刷して、買ってもらって活動資金にすることをやっていましたね。

植野：その頃、まだ梅田地下街には新聞屋さんがあったんですよ。本当に屋台みたいな感じでね。大阪は産経系でいうと大阪新聞とか、大阪日日新聞、そういう夕刊紙がいっぱい置いてあったんです。万博の前ぐらいに街をきれいにするというので売店が一斉になくなってしまった。何年か前に、串カツ屋を維新が撤退させたりするのと同じように新聞屋さんを排除して、ああいう夕刊紙も残っていないですよ。

番匠：梅田地下街というのは、JRから阪神に行くほうですか。

植野：阪神地下の百貨店の入り口と、今でいうと泉の広場がある通路で、阪急と地下鉄が重なってくる。全部が交差するような形に、あそこに集まる。

坂本：ちょっとスロープになっていて広場ふうになっていた。そこを自主管理して、通路は絶対空ける、必ずごみは片づけて汚さないことを徹底してやったから、その場ではトラブルになって誰かが逮捕されたことはなかった。時々、曽根崎署が来たりはしていたけれども。



梅田地下街の対話集会の現場、左は山本健治、番匠撮影、2024年8月29日

植野：僕、1回引っぱられたけれどもね。3時間ぐらいで帰らされました。

坂本：賛成、反対あるにしろ、少しおおらかやったというか。東京の新宿地下街は、後半はかなりセクトが入ってきて大変やったみたいやけれども、大阪はあまりセクトが入ってきてなかった。

植野：基本的に対話集会みたいな言い方をしたので、

それぞれゼッケンつけて対話を呼びかける。通行人の人がそれで別に激高するわけじゃなくて、反対の人も多いですけども、中にはもうちょっと話したいから、その喫茶店に一緒に行こうと誘われたりしたこともあった。そういう意見を交わす場みたいな、お互いが賛成、反対含めて、居心地のいい場所でしたね。

坂本：ハンドマイク1個でやるんやけれど、そんな大音量でないからお店から苦情もなかった。そんなに店がなかったから、本当に広場みたい。ちょっと下がったところに楽器店があったのかな。ギターを弾いていたらすぐ弦が切れるんで、そこに買いに走ったりとかね。

番匠：楽器店あったんですか。

坂本：あの地下街にあって、そこで買うたん覚えています。近所の店の人たちにも鬱陶しがられながら集会やってた。ただ唯一我慢できるのは、決して皆に迷惑をかけるためにやってるわけじゃないから、できる限り交通整理をして、終わったら当然のごとく掃除をしてましたね。そういうのは山本さんのもとの精神みたいなものやけど、何せ真面目やから、僕らもそれを当然のごとくやった。要するに騒乱するために行くんじゃないで訴えるために行くわけやから。ビラをまいたり、歌集なんかを売ってたんですけど、それを読んで捨てる人もおるから、必ず終わったらそれも掃除した。そういう形でやってたというのを覚えてますね。周りを見てちゃんとやっていたのはヤマケンぐらいなものか分からへんけれどもね。ヤマケンとか植野君とかが街頭で演説してビラを配ったり、奥井保さんがギターを弾いたり、僕もそれに加わってやったりしてました。山本健治と木村満彦¹²⁾と、もう一人は立川忠政さんという名古屋の人がいて彼は統社同やな。

植野：統一社会主義同盟¹³⁾。

坂本：立川さんはそんなセクト色丸出しということは全然なくて、僕なんかも全然そんなん知らなかった。ヤマケンもそんなセクト的な話は一切なかったし。

梅田地下街から新宿西口へ

番匠：坂本さん、今はギターは弾かれるんですか。

坂本：いや、もう全然。僕は地下街で一生懸命弾いてましたけれども、そのときは何も知らんとやってた。その後、それこそ友部正人¹⁴⁾がね、「大阪へやって来た」という歌とともにやってきよったんや。彼の歌を聞いたとき、ああ、もうこれはあかんわ。もうレベル以前の問題で、俺はなんていう恥ずかしいことをやってたんだと。それ以来、もう全然やらないですけどもね。

番匠：みんなが楽器を弾いたり、歌い出すというのが面白いですけども（笑）。

坂本：この本〔大木晴子、鈴木一誌『1969 新宿西口地下広場』〕は見はったことある。

番匠：あります。映画も見ました。

坂本：ここの連中なんていうのはそれこそ仲間ですけどもね。中心になった晴子さんてね、今は大木晴子やけれども、当時は山本晴子とிட்டた。その山本晴子さんと小黒弘君と、あと伊津信之介君いうのがね、3人が大体中心メンバーでした。このDVDも見ていたら、本当にいろいろややこしいことになっているけれどもね。大阪はあんなにややこしいことにならへんかったから。

番匠：フォークを取り入れた対話集会は南大阪ベ平連も天王寺でやっていたんですよ。

坂本：関西の梅田地下街のフォーク集会も、なんだいべの方が早いかもしれへんね。南大阪ベ平連はほんまに面白かった。小田実がすごい感心したことがあって、僕らは『北摂ベ平連ニュース』とか『関西ベ平連ニュース』で普通やけど、なんだいべは『朝日ジャーナル』のパロディーやねんけれども、『明日どーなる』[3号は『明日〔明〕の下に〔日〕で一文字〕ドーナル』、5号『あしたどほなる』、7・8合併号『ドーナル』という機関紙をつくった。ノリでやっていて、それを小田実が見て、むちゃくちゃおもろいって気に入ってね、えらい持ち上げとった。

番匠：機関誌の『なんだいべ』ではなくて、また別に出てたんですか。

坂本：うん。『なんだいべ』というのはあったけれど

も、その中で『明日どーなる』いうのを出した時期がある。「栄ちゃんのバラード」いうのも、南大阪平連の仲間が作詞作曲した。

植野：非常にユニークなメンバーの集まりでしたね。

坂本：ちょっとゆったりとしているねんけれども、ゆったりとしていて、結構、面白いことをやってて、あの辺のノリが僕らにはなかった。僕なんかはもうガチガチの真面目なタイプやったからね。そういう彼らの遊び心というか、ほんま羨ましいけれども、全然及ばなかったね。

番匠：フォークの歴史化がなされるときに、すごく東京中心の話になっていて、そのあたり理解はされないかもしれませんね。

坂本：東京はそれこそセクトが来るわ、言い合いになるわ、どうのこうのほんまに大変やったからね。

番匠：警察の介入も凄くきついですね。

坂本：[大阪の] 僕らの場合はそれほどひどいことにはならなかったから。

番匠：東京に歌いに行くきっかけは何だったんですか。

坂本：たまたま平連の若い人たちと話ししてるときに、大阪ではこんなやってるし、東京でもやりませんかというような形になった。それで東京でちょっとやって、僕らはもちろん帰るわけですけど、その後、小黑君とか伊津君とか何人かが中心になって新宿西口でやり出した。山本晴子さんは、当時マドンナと言われてましたけど、彼女なんかは本当に一生懸命やった。それこそ5千人から1万人ぐらい集まるような大集会にまでなったんだけどね。こっちは梅田地下街でやってて、最高あれ千人ぐらいでしたかね、そんなようけ集まれへん場所やから。

番匠：坂本さん、東京で捕まったとおっしゃっていたのは新宿西口なんですか。

坂本：うん。フォークゲリラは69年の夏にはもう終わってんのかな。東京の連中も捕まったりなんかして。その後、東京もやっぱり月1のデモみたいなのはやってはった。1970年2月に僕の盟友やった長谷川幸秀君と東京に行ったんですよ。清水谷公園のデモに行ったら、西口広場で歌うのはやめてる

と聞いて、「みんなでもう一回歌いにいこう！」というようなことを僕が言うた。もちろん、それで完璧にマークされてて、西口へ行ったら至るところに警官だらけでね。どないしようかと思ってたとき、周りで集まって来てた人が捕まりそうになったから、こっちは危ない思うて引っ張りにいこうと思ったら、もうあっという間に四方八方から警官が来て捕まった。おまけにその時に僕を助けようとした長谷川君も捕まってね。

番匠：そうなんですか、2人で。

坂本：10日ほど入れられたけれども。

番匠：新宿署ですか。

坂本：多分ね。もうどこに入れられたかも覚えてないけれども、初めての経験やった。その時に救援対策で山本[大木]晴子さんに大変お世話になりました。

ハンパク会場での素材にこだわったラーメン屋

番匠：坂本さん、ハンパクのときはどうしてらっしゃったんですか。

坂本：ラーメン屋さんをやっていましたね。

番匠：5日間ずっとラーメンを作っていたんですか。
坂本：うん。ずっとそこで麺を仕入れて、出汁を取ってやってましたから、あれは大変でしたね。あの時はあんまり積極的に運営に関わろうという気がなくて、単にラーメンを売るというのにこだわった。ただ、売る以上は別にインスタントじゃなくて、素材にこだわったちゃんとしたものをというのはありました。

番匠：メニューはラーメン一択ですか。

坂本：ラーメンだけやったん違うかな。野菜もあったかな。新鮮な野菜とラーメンというのをやったような気がするんやけれども。ハンパクの会期中というのはあまり印象に残ってない。

番匠：風景としても記憶には。

坂本：うん。だから、いろんな催しがあったけれども、全然見に行っていないかな。

番匠：高石ともやさんや中川五郎さんのフォークのティーチンにも行かれてないんですか。

坂本：ティーチンというのはあの当時は流行りでね。

ビーインとかティーチインとかいろいろ流行ったんやね。徹夜ティーチインというのがあって、それは行ったんかも分からへんけれども、覚えてないな。ハンパクみたいな大きなイベントというのは、中におると全体を俯瞰して、これ面白そうやからこれ行こうとか、そんなん違うねんね。我々もひたすら毎日毎日を無事にこなすみたいなの。

番匠：ラーメンは売れましたか。

坂本：結構、売っていましたよ。単にベニヤ板で囲った箱じゃなくて、よしずを使ってね。夏やったから、ちょうど清涼感みたいなのを出したりとか、いろいろ気を遣っていた。

番匠：カウンターで食べたんですか。

坂本：そんなんじゃないかなと思う。やっぱり床几みたいなのを設けて席をつくってましたよ。茶店みたいな感じで。

番匠：ハンパクには、ギターは持って行かれてたんですか。

坂本：ハンパクでデモがあったからね、8月の何日かな。

植野：御堂筋デモは最終日の11日。

坂本：第2日曜の8月10日に僕ら北摂ベ平連の定例デモがあったから、それに行こうというたら、ハンパクに来てる人の中から賛同してくれる人が100人ぐらいは行ったんかな。電車乗り継いで豊中まで行って、そこから新明和まで行って帰ってきた。そのデモは覚えてる。

番匠：そのときのデモは、やはりギターは持ち込むんですか。

坂本：僕が弾いて歌ったりもしたん違うかなと思うけれどもね。

植野：あの頃のベ平連のデモって大抵みんなね、ギターを持って歌うというのが定番みたいな感じになってた。

坂本：そうやったね。にぎやかしとかね。

植野：そこでは立川さんの指導力は何もなかった。

坂本：あの人の出番は、ハンパク最終日の御堂筋の大きなデモ。

植野：御堂筋のフランスデモの指揮をとってくれた。

坂本：御堂筋をずっと埋め尽くしてね。ジグザグデ

モもあったけれども、あの時フランスデモみたいな広がるデモを体験して、すごいみんな感動したん違うかな。

番匠：手をつないで進むんですか。

坂本：手つないだり、手つながらなかつたり。要するに広がるんです。

植野：御堂筋の全部の道を。

坂本：いつも端のほうに追いやられてたけど。最終日の御堂筋デモは全然警官らが間に合わへんから、しゃあないから放ったらかしやね。こっちも別にそれで暴れるわけじゃないから、ただ広がって。道路というのはこんなに広々使えるのかと、僕なんかはあれでほんまに感動したけれどもね。

番匠：御堂筋の両方の車線に広がってですか。

坂本：うん、両方とも全部ね。北から南までずっと。一時的やけれども、あそこが解放区みたいな、そういう幻想みたいなのをね。何回かそういう風に御堂筋を使うようなデモがあって、ハンパクの最終日にフランスデモをした扇町公園から御堂筋に出て、南下して難波まで行き、府立体育館前で解散するルートの他に、梅田から西梅田へ回り、中央郵便局前で解散するルートがありました。やっぱりジグザグデモも何回かやるきっかけがあって、そのときは行動隊長がいろいろ指導してくれる。おまえら、急に曲がったら後ろが大変やからとかね。その当時は僕も結構マークされててね、私服とかにいつでも飛びかかれるとか。それを防衛隊みたいなんで、僕の友達とかが守ってくれたりして、辛うじて捕まらんと何とかやってた。デモというのは、指揮なんかをやっていると、逮捕覚悟やからね。道交法違反の現行犯逮捕やから、ああいうときは捕まるなら捕まったらしゃあないなと。もう亡くなった長谷川幸秀君というのが僕の盟友やねんけど、彼は僕と背格好も一緒でね。1つ違いで下なんやけれど、当時、僕はもっとやせてたから、顔も割とひょろ長で、彼もそんなに格好が似てたんやね。かわいそうに、私服がよう間違うて捕まりそうになっていた。

番匠：影武者ですか（笑）。

植野：そういえば、太陽の塔で立て籠もった人がいましたよね。

番匠：目玉男ですね。

植野：はい。後から聞いたら、彼もハンパクには来てみたいなの。

番匠：あの方はどういう方だったんですか。赤軍を名のったけれども違うかったとか。

植野：たまたま知人から聞いたんですけれどもね、ベ平連にいたよという。

番匠：ベ平連だったんですか。

植野：どこのベ平連かも分からないし、誰でも自分がベ平連だと言うから。ベ平連ということを聞いたことはあります。

坂本：別に団員名簿みたいなものがあるわけじゃないしね。

文化と政治のあいだにある原点

番匠：ハンパクでは映画の同時上映もありましたね。

坂本：『網走番外地』とかね。僕は任侠の世界はだめなんですよ。僕はビートルズとかポピュラーのあれやから、そういうのん全然駄目やね。ちょうどあの当時に天王寺野外音楽堂で、後の春一番コンサートのその前段階で、Be-In.LOVE ROCK というイベントがあった。あれもにすごく影響を受けましたね。愛と平和というのは、いま言うに恥ずかしいけど、当時はやっぱりそういうのがすごく格好よかった。任侠路線とかやくざ路線じゃない。ちょっと後で映画の『イージー・ライダー』とか、アメリカンニューシネマが出てきた。そういうところの中に僕は引き込まれていったから、植野君とか木村〔満彦〕さんと違うてん。

番匠：アメリカンニューシネマも『ボニー&クライド』とか結構暴力路線では。

坂本：反抗ですよ。世代としての反抗。だからあれもいうたら任侠路線。耐えて耐えて耐えて最後に爆発するそうかしらんね。ジョン・レノンとかボブ・ディランとかの影響が大きくて、もちろん日本では小田実さんですよ。あのベ平連の彼の考えた論理というか、そういうのがすごく新鮮であって、アメリカでいえばそういうプロテストフォークみたいなものですけども、だから政治と文化の狭間みたいなところに僕はずっと惹かれてたんですよ。当時

は政治のための文化で、要するに人集めの手段なんですよ。そういう人集めのための手段じゃないメッセージソングというか、そういうのんにずっと惹かれてた。当時の日本のフォークというのはマイク眞木の「バラが咲いた」とか、ニューミュージックと言われてその後ずっと日本の音楽シーンをリードするような人たちの歌で、僕らの世代は好きな人が多いですけども、僕は嫌いでした。やっぱりそうじゃない音楽というのが高石ともやであったり、岡林信康でした。中川五郎なんか年取るほどにラジカルになってね。福田村事件なんかは延々あれ1時間ぐらいずっと歌い続けて、すごいですよね。彼、若い頃はわいせつ裁判をやりましたし。

番匠：フォークリポートに掲載されたものですね。

坂本：だから人集めのためのというか、あるいはプロパガンダのための音楽いうたら念仏みたいなもんです。そうじゃない。音楽は音楽で文化だし、それは政治の演説であるのと同じように歌は歌で文化であるという。どっちかじゃなくって、その両方を持ってるんちゃうかと。それまでの音楽というのが、それこそベンチャーズとかプレスリーとかは、20代の頃から60代、70代ずっと同じような形でやってるし、そのファンもずっと引き連れて一緒ですよ。ビートルズ以降というのは明らかに音楽に段階があって、その段階についていけなかったらファンやめるんですよ。ビートルズやったらラバーソウルあたりでガラッと変わってしまうんです。ボブ・ディランもそうでしたけど、フォークの神様だったけどエレキギターを使うと皆からバッシング受けて、それでも自分の道を行くみたいな感じ。それは、集会のための人集めであつたりとかじゃなくて、それ自体が芸術というか表現であつてね。表現の形式は演説であつたり、詩であつたり、演劇であつたりいろいろあるでしょうけど、それこそ「ビーイン (be-in)」ですね。共にある。そういうのにすごく若い頃は惹かれて、今ももちろんそうですけども。それが僕の原点です。

その前に、ちょうど僕が一浪して阪大に入ったときに沖縄問題研究会というのがあった。その人たちに沖縄に行こうというふうに誘われて、もちろん

まだ復帰前ですからパスポートがいった。だから渡航許可証みたいなん取って、鹿児島まで行ってそこから船で1日ぐらいかかったのかな。沖縄から阪大に来てた留学生が紹介してくれて、ずっと沖縄県内の公民館に泊まらせてもうたんです。僕らは15人か20人ぐらいましたかね。みんな阪大の1年生、2年生とかそんな連中です。僕もその中に入れてもらって、公民館に泊まりながらずっと沖縄をまわっていく。あれが自分の中で、すごい原点になってますね。その時にいっぱいスライドを撮って、帰ってきてみんなに見てもらって、集会をやったりするという。帰ってきてからそういう流れの中でやっていくという形で、僕の中でベ平連の運動はその延長線上にあるんですけども、ちょっと文化のほうの重きが置かれていた。

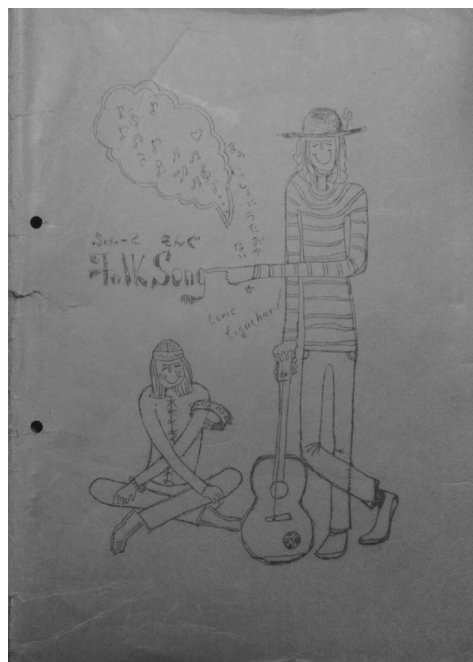
大野：沖縄の当時フォークムーブメントは、本土から少し遅れて始まったんですけど、何か若い人たちと交流とかというのはあったんですか。

坂本：公民館で寝泊まりしますから、交流はありましたけど。いろいろ驚くことがあって。沖縄というのはみんなが集まってくるのが遅いんですよ。夜の10時ぐらいに集まってきて、そこから明け方まで。我々には想像もできないような形で、暑いから昼間は駄目なんですよ。そこでできた友達と、後になってまたつながって、三線の響きというのがやっぱりすごく惹かれた。今はちょっと辺野古への抗議なんかも、何もできてないからもう沖縄なんか恥ずかしくて行かれへんというかね。

運動と音楽の場としての喫茶店フリーク

番匠：1970年の『北摂ベ平連ニュース』では、例えば「どしゃべり会」とか「20世紀の谷間社」、「めった切り会」というのがそれぞれ小さなグループとしてあって、それぞれが週1回に喫茶店に集まって活動しているようです。「めった切り会」は女性解放宣言が書いてあり女性限定の会になっていて、20世紀の谷間社のほうは毎週土曜日に豊島公園でギター教室をやったりしています。

坂本：1972年に僕が豊中でフリークという喫茶店を始めるんです。



写真：北摂ベ平連フォーク歌集『Folk Song(ふぉーくそんぐ)』
20世紀の谷間社、発行年不明だが1969年から70年にかけての時期だと推測される。

番匠：20世紀の谷間社というのは、喫茶店フリークとはどういう関係なのですか。

坂本：北摂ベ平連の文化部門のようなもんやね。

番匠：フリークは和田長久さんのお連れ合いの和田明子さんとの共同経営だったんですよね。店番は2人が立ってるんですか。

坂本：和田さんの家の一階を使ってやっていたんで、交代でやっていた。朝にお店を開けるのは明子さんで、僕は昼に行って夜までやっているという。たまに用事があると代わってもらったり、友達に入ってもらったり。

番匠：豊中の駅の方ですよ。

坂本：昔の能勢街道かな。十三から豊中通って、池田から妙見山の方へ行くような旧道のところにあったんです。阪急電車が通ってますけど、その阪急のすぐ北のところに線路沿いの道があって、旧街道が豊中から岡町までつながってます。豊中駅から5分くらいのところですよ。

番匠：和田さんもずっと住んでらっしゃたんですか。

坂本：当時は和田さんは軍縮協の事務局長で、奥さんは子育て中で、奥さんと僕とで始めた。和田長久さんとは能勢のナイキミサイルの反対運動とかを通じて知り合いだった。和田さんもジャズの音楽好き

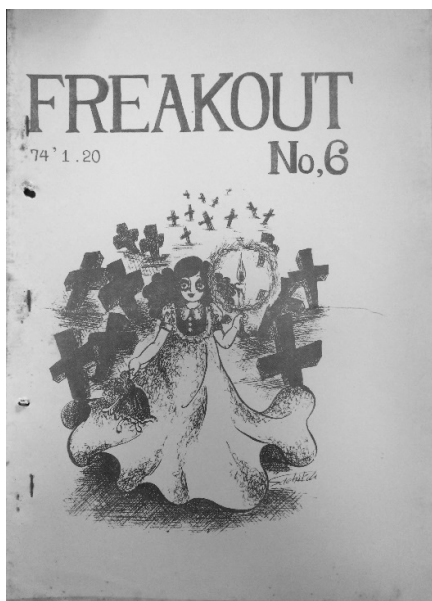
だったんで、僕はピンクなんかと音楽にのめり込んでたので、それで喫茶店でもやろうかという話になった。それで和田さんが家の一角を提供してくれた。

番匠：もともと店だったんですか。

坂本：いえ、普通のお宅でした。道路沿いのところを一部改装して喫茶店にした、せつまい所でした。カウンターがあって、向こう側に据え付けのイスがあって、奥にもう一つ部屋があってテーブル席が四つあった。最初できた時はカウンターに5人くらい、後ろの席に10人くらいの店で、後で隣の部屋まで広げて30人くらい入る店にはなりました。

番匠：お店自体はだいぶ後までやってたのですか。

坂本：僕は1975年に選挙に出て、秋くらいにフリークをやめる形にした。そのあとお客さんで来ていた柳生君が音楽好きで、豊中市内の別のところでフォークとかロックとかをかけるような変わった店をやっていた。そこが潰れて何もしてなかったの、彼が引き継いでフリークを3年くらいやっていた。フリークでも僕を知っている人と柳生君を知っている人とで違う。柳生君はマイナーなアメリカンフォークとかに凄く詳しく、誰よりも早くそういう情報を仕入れて、音楽好きは彼とはずっとつながっていた。いま豊中にある金森幸介¹⁵⁾とか、友部正人とか、いとうたかお¹⁶⁾とか、そういう人ら呼んでライブやったりしていました。



写真：『Freakout』No6、発行：坂本洋、1974年1月24日

坂本：これが当時出していたもので、みんなガリ版でやっているんですね。この絵は、当時フリークに来てたデザイン志望のちょっと変わった女子高校生がおって、その子がいろいろ描いてくれた。

ちょうどハンパクが行われたのが1969年8月やね。それが終わった後、70年になる頃には、饗庭野ナイキ基地とか、能勢ナイキ基地の反対運動とかがあったけれども、活動自体がちょっと広がり過ぎて、北摂へ平連の中にいろんなグループができていた。

百谷峰直君は、僕らの中で一番音楽に詳しく、よく間違っ「桃」になっているけれども、百谷でモモタニというんです。彼が中心になって、ギター教室をやっていました。梅田地下街でももちろん歌ったりしていました。石橋に音楽喫茶みたいなものあって、百谷君がそこでいろいろ活動してた。百谷君は、桃に通じるから「ピンク」といって、そんな字ないけれども、貧しいの「貧（ヒン）」という字に「°」をつけて「貧°（ピン）」なんですよ。

番匠：貧困の貧にマルでピンですか。

坂本：百谷で「ピンク」、「ピン」って言われていたから。貧しいにマルをつけて苦しいとなって、「貧°苦」でピンクに。最初、ひどい歌を歌っていたんですけれどもね。

番匠：ひどい歌というのは。

坂本：池田高校の僕の後輩なんですけれども、高校時代は全然知らなかった。池高で遅れてきた世代なの、いろんな活動をやって、歌をやっているの、平連にも来た。その当時、彼が歌ってたのは、「俺はブルジョワ」という曲で、俺の周りには金だらけやとか、ホンマにしょうもない歌詞だった。当時、僕はディランとかジョーン・バエズとか聞いてたから、「直接的にそんなことを言うたってしゃあないから、もうちょっとひだのある歌を歌わんとあかん」という話をしてた。その後、彼はどんどん深化していくわけですね。

番匠：しょうもない方も聞いてみたいです。

坂本：音源なんかあらへんけれどもね。その当時、ちょうどジョン・レノンとポール・マッカートニーのような感じでね、百谷峰直（ピンク）君と長谷川

幸秀君の二人がおりました。長谷川幸秀が作詞してピンクが作曲するという、レノンとマッカートニーみたいなのを意識してやっていた。その歌が「貧苦巢（ピンクス）」につながっていった。レコードも出しているんです。

番匠：貧苦巢（ピンクス）の、写真に写っている方はどなたになるんでしょうかね。

坂本：真ん中がピンクですね。あとは、右上がギターの清水一平、左下がベースの杉浦孝司、左上がドラムの備瀬益男で、彼は沖縄出身なんですよ。右下はキーボードの国府てるゆき。



写真：貧苦巢『MOMOTARO PINK with Original PINKS』シールズレコード、2000年

番匠：そうなんですね。

坂本：もう3人は亡くなりましたけれどもね。貧苦巢（ピンクス）のオリジナルのメンバーで残っているのは清水一平だけです。これがレコードのオリジナルジャケットかな。この辺の曲は全部、長谷川幸秀が作詞して、ピンクが作曲した。

番匠：喫茶店フリークを拠点として活動していたんですか。

坂本：だから、全然メジャーにはなれなかったけれどもね。でも歌詞と内容に関しては、隠れたファンがいる。

番匠：有名人でこの時代の音楽やプロテストの在り方を語ってしまうことには問題を感じていて、一人一人の顔から時代が見えるようにしたいです。

坂本：そんな大層なこと違う。ただね、その辺は根幹に関わるところでね。東京と大阪の大きな違いなんです。東京はいうてもね、学者とか、評論家とかそういう人たちが上位にいてはって、「小田天、小

田天」というて小田実も「小田天皇」とか言われていた。現場でビラを配ったり、発送作業をするのが好きやいう小中陽太郎さんがおったけれども、みんなが大体偉そうに言うて、若い子がいろいろやっていた。そういうのが大体おかしかったわけやからね。評論家や学者がリードして、大衆はそれに従うというのは、言うてることと違うやないかというのがあった。

特に大阪では言うだけはあかんのやね、やらんとあかんから。そんな中で、自分たちがそういう質とかね、運動の質みたいなもの、ようけ集めりゃええというわけじゃない。お互いの違いを強調するあまり、後でゲバルトに走ったりとか、いうたら一神教ですよ。そうじゃなく、それぞれが違うけれども、一緒のところを見つけて、それなりに掘り下げて深める。さっき言うたピンクも、ビートルズかて、最初そうでしょう。「抱きしめたい」とかそんなんから、「リボルバー」あたりからかなり変わっていくわけですよ。内面にね、深化していくというか、自分の中で深まりを持っていく中で広がりやまた別のところでできていくという。

ボブ・ディランも最初はやっぱり「風に吹かれて」なんかでいきなり有名になったけれども、それだけやっていたんでは広がりがないと思うから、ロックを取り入れたんですけれども、それでブーイングが起きてね。泣きながら「It's All Over Now, Baby Blue」を歌ったりして、あの当時は全体としてみんな深化していく。プレスリーまでの音楽とビートルズ以降の音楽は違うというのが僕なんかの考え方で、やっぱり演奏する側と聞く側が一緒に変わっていくというのがビートルズ以降の音楽なんだろうかな。そんなんでピンクも深化していったわけですよ。

自分たちで、そういう権威主義を排して、みんながフラットなつながりの中で、一緒にやれる点をつなげてやっていこうと。大体セクトというのは、みんな一神教になってしまうからね。俺らだけが正しい、自分たちだけが正しい。共産党なんかも当時は大きいことは良いことみたいな感じになった。確かに数がおらんのはあかんけれども、それでも大き

けりゃええというもんでもない。広がりを持っていかなあかんのやけれども、僕らは小さいなかで、やっぱり深まりみたいなものを持っていかないとずっと思ってた。分からんなりにやっていて、さっき話が出た立川さんが「坂本君な、質というのはな、ある程度、量があって初めて質が問題になるねんで、そんなあんた僅か10人ぐらいの中でな、質を問題にしたらあかん。」と教えてもらってね。

番匠：立川忠政さんも同じグループですか。

植野：立川さんはヤマケンなんかと同じ立命館大学法学部の同級生です。先ほど梅田地下街のフォーク集会で名前が出た奥井保さんも立命館で、同じ文学部の後輩で梅田地下街に関っていた緑川文男さんもしました。

坂本：立川さんというのはね、行動派でデモ指揮が格好よかってん。僕らは全然知らんでしょう。だから普通にデモするわけやけれども、一番最盛期になってくると御堂筋に何千人の人が詰めかけて、それなりにジグザグとかやったりする。立川さんがみんな昔取ったきねづかやから教えてくれる。先頭はジグザグいうたって、絶対ぐるぐる大きくなったらあかん。先頭がちょっと動いたら、後ろは物すごく動くんやと教えてもらって、面白かったですけどもね。立川さんは行動隊長ですね。

植野：ヤマケンが理論のほうやね。

坂本：セクトとは言えないような割と緩いセクトで、僕らにもセクト色は極めて出さないような形で付き合ってくれて、いろいろ教えてもらった。大阪の我々の周りの人間というのは、決して一神教になって他を排除したりとかね、内ゲバをやったりとか、そういう方向とは無縁やったんです。それは絶対にやったらいかんという。フラットで、みんなそれぞれに自分にできるところで繋がろうという、それはやっぱり関西の僕らの運動の持っていたささやかな質だと思いますけれどもね。

活動拠点としての喫茶店

坂本：僕らの中でも全然克服できなかったのは、やっぱり女性の問題とかね。あの当時やっぱり運動の中における女性の問題は全然残ってた。

番匠：『北摂平連ニュース』の「めったぎり会女性解放戦線」は、そのあたりを受けてでてきた動きですか。

坂本：北摂平連も、ハンパクが終わった後でいろいろ運動が多岐になって、いろいろ浮き沈みがあった。そのとき小グループみたいなのができていたのかな。気負いみたいなものを持ってやってた人たちもいてはった。セクトの中の女性というのは当時かなり頑張らないと、自分たちの組織の中というのは旧態依然たる男の世界やからね。そういう建前と本音みたいところをできるだけ分けないというか、今まで知らなかったことも、やっぱり自分らは取り込んでやっていかないと。

番匠：この方たちはその後リブの方に、つながっていくんでしょうか。

坂本：つながってくるけれども、僕はそのあたりはちょっとなかなか関わり切れてない。むしろその当時のリブの人らは、男なんかの関わりをむしろ拒否してはったからね。

番匠：拠点になっていた当時の喫茶店V7とパルという名前が出てきます。

坂本：パルっていうのはもう今はないでしょうけれどもね。石橋の駅から出たところにあるちょっと引っ込んだ一角だったんですよ。近くにはモンクというジャズ喫茶があってね。そこは僕らもよく出入りしてた。モンクのちょっと奥のところにパルという、歌声の人なんかも利用してたような喫茶店ですね。そこで友達の結婚式をしました。勉強会なんかもあったのかな。

番匠：『北摂平連ニュース』でどしゃべり会は木曜日に喫茶店V7とあるのですが、こちらの店は使われていましたか。

坂本：ちょっと記憶に出てけえへんね。石橋の駅前のこの辺はいろんな喫茶店があったんですよ。今みたいにスターバックスとかあんな感じじゃなくて、小さいけれども個性的なマスターがおって、いろいろマスターと会話もできて、その喫茶店なりの特徴があった。阪大があって学生の街やからね、石橋は。僕以外で、後で加わってきた池田高校の同級生の何人かがそれをやってたん違うかな。僕はハンパクの

後はちょっとあんまり活動がうまくいなくて、その後、1970年2月やったかな東京で逮捕された。

番匠：それは大きいですね。

坂本：そうやね。まだその当時は笹部に住んでたんですよ。ただでさえ変なことをやっとなのに、逮捕されて私服が聞き込みに来るとかで、ほんまに悲惨なことになって。

番匠：豊中の永楽荘に引っ越されたのはやっぱりそういう経緯があったんですかね。

坂本：それもありました。笹部の家屋敷を売って永楽荘に移ってきたんですね。

番匠：じゃ、もうご家族みんなで。

坂本：その当時には祖父と祖母はおりませんけれどもね。母親と妹と僕とが、その永楽荘でも10年ぐらいおったのかな。そこで次の喫茶フリークのいろんな準備をやってましたね。

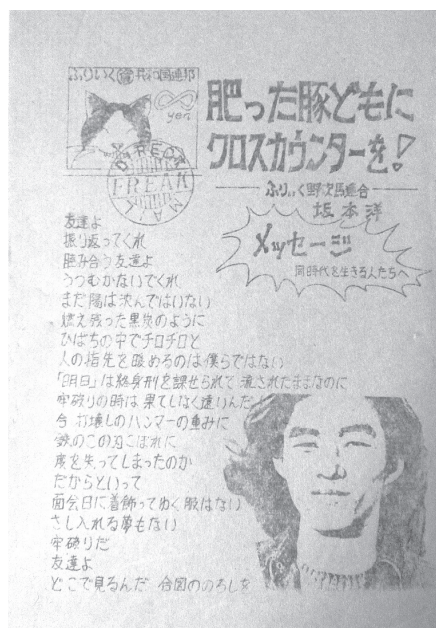
番匠：コーヒー1杯、幾らだったんですか。

坂本：僕がやった喫茶店では、コーヒーはその当分で150円やったかな。その後、選挙に出たりもしたんですけれども。

番匠：お借りした『フリークアウト』に「太った豚どもにクロスカウンターを」というのが入ってたんですけど、あれ選挙ポスターだったんですね。

坂本：恥ずかしい。「肥った豚になるよりは痩せたソクラテスになれ」¹⁷⁾という東大総長の大河内一男さんの言葉をちょっとひねっただけ。僕と山本健治さんは同じ1975年に最初に選挙に出たんですけど、市民運動をやってる人間が議会制民主主義なんかに出ること自体がもう無茶苦茶バッシングを受けた。要するに議会制に取り込まれたとか、何かに媚びるんかみたいな、そういう時代でしたからね。だから全然最後までお願いしないような選挙でした。要するに自分たちの言いたいことを、ベトナム反戦であるとか、地方自治とは何かとか、平和とか、憲法とか、自分たちが言いたいことを言う表現の場にしようという位置づけでした。当然一定の支持はあって法定得票数は確保しましたが、当選にはなかなか。このとき豊中市議会に僕を含めておかしいのが5人ぐらい出たんですよ。もちろんみんな落ちました。あのとき桂米朝さんが面白いなと思って

くれはったんか、選挙が終わった後、5人をテレビに呼んでくれはった(笑)。



写真：坂本洋氏選挙ポスター、坂本氏所蔵

手づくりの音楽文化

番匠：『北摂平連ニュース』No.18には、1970年4月25日に天王寺の野外音楽堂で開催されたBe-In.LOVE ROCKの宣伝があり、ロンリーハートクラブ主催「ビートルズ映画とフリーロックコンサート（イエローサブマリンを除く全てのビートルズフィルム）」とあって、沖縄デーや万博粉砕についても書かれています。ビートルズ映画は、何を流したんでしょうか。

坂本：さっきも出たけどBe-In.LOVE ROCKの「ビーイン (be-in)」というのは、当時流行った言葉で、共にあるとか、そんな感じですね。カリフォルニアのヒッピー文化ですけども、ちょうどウッドストックとかあの辺の影響もすごく大きかった。そういう愛と平和の中に俺たちは共にいようという「ビーイン」ですね。あと「ドゥーイット (do it)」というのもあって、当時は新しい言葉として出てきた。

番匠：これイエローサブマリンは何であかんのですか。

坂本：ビートルズのアニメーション映画みたいなもんやけれどもね。別に潜水艦やからあかんとか、そんなこと言ってなかったと思う。これは僕が直接主

催でやったわけじゃないから。

番匠：春一番¹⁸⁾ へつながっていく流れのイベントですね。

坂本：僕の周辺では貧苦巢（ピンクス）の周辺におった田中研二とかね。春一番は福岡風太という伝説の人がおりまして、今は息子がやってます。天王寺の野外音楽堂で自分らの手作りで音楽をやろうというのがあって、福岡君と私は同じ世代なんですよ。福岡君はたしか豊高で、さっき出てきた長谷川幸秀君なんかも福岡風太とつながりがあった。興行師の手を借りんと自分たちの手作りでやろうというのを始めたのが福岡風太です。当時は彼もフリークに來たり、一緒にやったりとかいうのもあったんですけども、彼は天王寺の野音でやって、僕は豊中で「はみだしコンサート」というのを豊中市民会館でやった。

当時は全てが新しい時代やったんですよ。アメリカのニューシネマの話をしましたけど、『イージー・ライダー』にすごくショックを受けました。だから『イージー・ライダー』に登場するバイクのハーレーダビッドソン、僕もバイクにあこがれて400ccに乗っていました。あんなに憧れて、立川さんといろいろ話したら「坂本君、あれはな、マリファナの麻薬とかそんなんの密売で得た利益でやってるから、あれはちょっと問題あるよね」と怒られた。伝統的左翼から來た人にとっては、やっぱりああいうのは違和感があった。

番匠：けしからんと。

坂本：でも実際はそうやね。彼らは麻薬を売った金で自由を買って、最後、撃ち殺されるわけ。でもすごく新鮮やったんですよ。だから文化的に大きな変革期で、ロックでもそうですけれども、フォークも最初は関西フォークみたいな感じで出てきた。その後、ロックもはっぴいえんどが出てきて、日本語のロックやけれども、ちゃんとしたロックをやり出す。ピンクもはっぴいえんどと同じ時代を生きてきたわけだね。メジャー性という点では全然違うけど、僕はピンクの歌と音楽というは当時としては凄く良かったん違うかなと思っています。

番匠：最初に聞いたときはピンクさんと頭脳警察の

パンタさんと混同していました。

坂本：頭脳警察はPANTA。「はみだしコンサート」の第1回目に頭脳警察を呼んでやったんやけれどもね。当時は素人でも有名なミュージシャンなんかを呼んでイベントができた。音響面は僕らの仲間でも一生懸命ヤマハとかから機材を集めて、自分たちでPA（音響）をやり始めた。ゼットカンパニー、ゼットサウンドというのが僕らの仲間なんですよ。ハンパクの話で警察無線がどうのってあったでしょう。あれは801 統一戦線というアマチュアハムのメンバーがちょっと知恵を貸していた。

番匠：それがゼットカンパニーと重なるんですか。

坂本：ゼットはその辺で絡んでたんですよ。ゼットは、いろんな技術にたけてた人間が周辺におって、さりげなくサポートしたりしていたのがハンパクで一つの形になったということですね。僕なんかは全然そういう深いところは知りませんけれども、そういうのがいっぱいいた。秘密組織じゃなかったけれども、でもあんまり表に出されへんことを裏で、要するに脱走兵の問題に関わっていたりとか、そういうのも含めてあったということですね。

フリーク以後

番匠：坂本さんはフリーク以降は何をされてたんですか

坂本：阪急百貨店の配達のアルバイト、請負で一個運んでなんぼというのを何年かやった。それが20代後半ですね。子どもができて、定職につかんとヤバいかなというので、山本健治さんから京都の運送会社の仕事を紹介されて、いうたら労働の現場でやりなさいと期待されて行っった。僕は中に入りきれず、違う運送会社に入って、子どもが大きくなるまで20年くらいドライバーとして働いていましたね。

番匠：なるほど。

坂本：1975年というのは選挙の年で、ヤマケンは高槻で出て当選、僕は豊中で出てあかんかった。その後の統一地方選挙の時はヤマケンの選挙を何回か手伝って、1991年には、重度の障害を持つ車いすの女性の豊中市議会選挙を全力で応援して見事当選！という感動的な体験をしました。その後、

2000 年ごろからは周辺の箕面市とか川西市で女性や普通の市民を議会に送り出すような運動を地域で担っていました。かつて阪大ベ平連をやっていた仲間が箕面市長選挙に出て当選し、彼の事務所の専従みたいなこともやっていたけど、二期目で負けた。あとは能勢で田んぼを借りて無農薬・有機栽培の米作りをやって今年で 35 年目です。

番匠：能勢はナイキの闘争からのつながりですか。
坂本：そこからの繋がりもありますけど、ピンクも東能勢に住んでいたんで、その辺で農家の人とつながりができた。スリーマイルの事故があり、チェルノブイリの事故があり、子どもも小さかったし、同じくらいの年代の団塊の世代かちょっと下の世代くらいが子どもが生まれた頃で、子どもに安全な食べ物をするので、手近なところで産直とか、能勢の農家に話を持って行って無農薬で有機栽培でやるという。その時お互いにメリットがあるという、農家にとっても損にならない方法は何か。除草剤使う代わりに、僕らが田んぼに入って田車で除草する。自分らで草抜きして、コメは自分らで引き取りますと。僕等より一回り年下で太っ腹の農家の人が出て、能勢の 3 反半の田んぼお借りしてやって 35 年続いている。猫の手にもなれてないけど。僕らは最初の趣旨がお手伝いをする、その米を自分らで買い取るという形やから、収穫が減ると農家が減収になる。若い頃はがんばって迷惑かけたらあかんと思って一生懸命にやった。だんだん世代交代するとイベント的な参加が多くなってきて、田植えと稲刈りだけどっと来るけど、あいだの草抜きはあんまり来ない。最盛期は新聞に載るとどっと来るから、百人くらいで一斉に田植えしていた。

番匠：手で植えてたんですか。
坂本：3 反半は広いから、その一部を残してもらって。昔ながらの数珠玉ついたロープをはってずらしていく。そういう形でやっていたんですけどね。われわれの最初の仲間の 5、6 人で細々とやるから追いつかない。いま息子が世話人を引き受けてくれたんで、僕は記録係として写真撮って、ホームページとかやってるんだけど。
番匠：まだまだ頑張らないとですね。長時間のお話

ありがとうございました。

参考資料 北摂ベ平連フォーク歌集曲目リスト

以下は坂本氏が所蔵する北摂ベ平連のフォーク歌集の曲目をリスト化したものである。曲情報のクレジットは冊子のママとした。歌集の発行年は不明だが活動時期から 1969 年から 1970 年にかけてのものである。北摂ベ平連では歌集のほかに、歌詞・楽譜・評論・エッセイ・イベント情報などを掲載したフォークの機関誌『20 世紀の谷間から』やカセットテープ『Folk Tape』を販売していた。

『Folk Song』発行：20 世紀の谷間社・北摂ベ平連、発行年不明	
世界は今	詩：すずきめいこ、曲：ももたにみねなお
うた (capo4)	詩：山内清、曲：中川五郎
友よ (capo3)	詩・曲：岡林信康
小川のほとり	
聞こえるのは何だろう	作：フィル・オクス、訳：中川五郎
かっこよくはないけれど	
豊中自由大学歌	詩：奈良昭彦
ヘ・ライディ	
グァンタナメラ	
メドガーエバースのバラード	
戦争の親玉	作：ボブ・ディラン、訳：高石友也
思い出しておくれ	
We shall overcome	
それで自由に	岡林信康
20 世紀の谷間から	詩：ビタミン C、曲：ももたにみねなお
発行元については、「北摂ベ平連から自立したフォーク部門は、新たに「20 世紀の谷間社」を作りました。毎月一回フォーク雑誌を発行したり、フォークソング・テープを作ったり、独自のフォーク歌集を計画したり……様々な事をやろうとしています。興味のある方はぜひ参加してください。連絡先⇒兵庫県川西市笹部□□坂本洋気付 “20 世紀の谷間社”」10 頁とある。	

『Folk Song』20 世紀の谷間社・ベ平連、発行年不明	
うた (capo4)	詞：山内清、曲：中川五郎
戦争の親玉	
いつの間にか	詞：山内清、曲：中川五郎
栄 chan のバラード	作詞：なんだいべ、作曲：南大阪ベ平連
友よ (capo3 ～ 4)	作詞：岡林信康
グァンタナメラ	
豊中自由大学歌	詩：奈良昭彦
機動隊賛歌	詞・曲：名古屋 友部氏
それで自由に	岡林信康
世界は今	詩：すずきめいこ、曲：ももたにみねなお
思い出しておくれ	
We shall overcome	
ホー・チ・ミン	
聞こえるのは何だろう	作：フィル・オクス、訳：中川五郎
20 世紀の谷間から	詞：VitaminC、曲：谷直人

巻末には以下の呼びかけ文がある。「あなたの行動が必要です 反戦歌をうたっているだけでは、決して真の平和はやってきません。本当の平和、自由、権利、平等は待っているもやって来るものではないのです。私達が自分の力で獲得すべきなのです。権力者達は政治、経済、情報社会を一手に牛耳り、私達を余儀なく自分たちのペースにまきこもうとしています。地下街でうたうことさえ弾圧するほど現在の体制は強固に我々を圧迫しようとしています。何故なら貴方が行動に移る事を恐れているからです。私たちは現在の体制を支えている自分というものを深く認識して、情勢をはっきりとらえて自分に出来る最大限の行動をとらねばなりません。あなたの歌っている反戦歌の意義を行動に！ベ平連は自立する個人の運動体です。北摂ベ平連 連絡先⇒兵庫県川西市笹部□□ 坂本洋気付」12 頁

『フォークソング』20 世紀の谷間社、発行年不明	
歌う自由を！	曲・詩：小黒くん（Tokyo フォークゲリラ）
うた	詞：山内清、曲：中川五郎
友よ	岡林信康
<資本家非人間同盟のテーマ> ブル・ロック	作：たになをと（Pink）
ゲンタナメラ	作：ホセ・マルティ、訳：おおたぼう
小川のほとり	
思い出しておくれボクを	曲：フィル・オクス、訳：高石友也
栄ちゃんのバラード	曲・詩：南大阪ベ平連
世界は今	詩：すずきめいこ、曲：ももたにみねなお
聞こえるのは何だろう	曲：フィル・オクス、訳：中川五郎
いつの間にか	詞：山内清、曲：中川五郎
戦争の親玉	曲・詩：ボブ・ディラン、訳・編：高石友也
殺し屋のブルース	中川五郎
それで自由に	岡林信康
炭坑のイレズミ	
解放区をつくろう！	作：友部正人
20 世紀の谷間から	詞：ビタミン C、曲：谷直人

『フォークソング』20 世紀の谷間社、発行年不明 兵庫県川西市笹部□□ 坂本洋気付	
それで自由に	作：岡林信康
世界は今	し：すずきめいこ、きょく：ももたにみねなお
ゲンタナメラ	作：ホセ・マルティ、訳：おおたぼう 映画『キューバの恋人』の主題歌
いつの間にか	詩：山内清、曲：中川五郎
うた	詞：山内清、曲：中川五郎
栄ちゃんのバラード	南大阪ベ平連
うた Mark II	作：小黒弘（東京フォークゲリラ） 東京フォークゲリラのリーダー小黒弘君の曲。彼は新宿西口広場でフォークソングをうたったため逮捕され、三泊四日の憂き目にあい、起訴されました。そして再び街頭に立った彼から発した最初の叫びがこのうたです。
炭坑のイレズミ	
思い出しておくれ	作：フィル・オクス、訳：たかいしともや 作：中川五郎
殺し屋のブルース	作：中川五郎
かっこよくはないけれど	
グッバイフレンド	詩：山内清、曲：中川五郎
解放区をつくろう（capo2）	作：友部正人
聞こえるのは何だろう	作：フィル・オクス、訳：中川五郎

『ふおをく そんぐ』ベトナムに平和を！市民連合北摂ベ平連
兵庫県川西市笹部□□ 坂本洋気付、発行年不明

カッコよくはないけれど（capo2）	
いつの間にか	
戦争ぎりい	
ちっちゃな箱	
学校で何を習ったの	
風にふかれて	
花はどこへ行った	
母さん教えて！キリスト教反戦歌	し・きょく：ばんざいはるよ
ノンポリ君への手紙	し・きょく：ももたにみねなを
思い出しておくれ	
栄ちゃんのバラード	作：南大阪ベ平連
山谷ブルース	
クソクラエ節（capo4）	
戦争は知らない	
腰まで泥まみれ（capo5）	
君のまわりを見つめてごらん	
あの人の日曜日	
今はこんなに元気でも	
まま子	
あなたのすぐそばに	し：すみのすみ、曲：中島太一郎
戦いの夜	し：すみのすみ、曲：中島太一郎 上の 2 曲は北摂ベ平連新作フォーク第一弾！1969.2.21
ひとびとよ語れ	作詞：小田実、作曲：国府田恭子
遠い世界へ（capo2）	
うた	し：山内清、曲：中川五郎

【注】

- 喫茶店フリークの機関誌に掲載された坂本氏の経歴では、1967 年 4 月に大阪大学基礎工学部入学、1968 年 3 月に北摂ベ平連を結成、1972 年 3 月にロック喫茶フリークを造りマスターとなる、とある。（カラン Kraan 編『番外 Freakout』ふりいく資本主義共和国連邦、発行日：1975 年 4 月 12 日）。
- ソノシートのカバー裏面に「これは、アメリカで著名なフォーク歌手で熱烈な平和活動家ジョーン・バエズ女史を迎えて行われた「ハノイ・ハイフォン無差別爆撃抗議学生平和集会」の録音から、平和のための力強い連帯の雰囲気を広く伝えるために編集したものである」とある。『日米連帯平和集会の記録——ジョーン・バエズを迎えて』ソノシート編集発行：平和集会記録発行委員会。
- 『息子たち娘たち（Sons and Daughters）』、監督：ジェリー・ストール、1967 年、1 時間 38 分。1965 年 10 月 15 日から 16 日にかけてサンフランシスコ湾岸地域でのカリフォルニア大学パークレー校からオークランド陸軍基地までの数千人の反戦デモの様子を撮影したドキュメンタリー。
- 映画『いちご白書』：スチュアート・ハグマン監督、1970 年公開。コロンビア大学の大学封鎖を扱った映画で、アメリカン・ニューシネマの作品とされる。
- ジェリー・ルービン [1938-1994] ベトナム反戦運動の活動家であり、アビー・ホフマンらと青年国際党（YIP）を創設。
- 吐山継彦 [1946-2011] 京都府生まれ。大阪府職員、予備校講師、企画会社社員などを経て、編集・広報グループ言葉工

房代表、大阪ボランティア協会常任運営委員、市民活動総合情報誌『Volo（ヴォロ）』編集委員長。著書として『市民ライター入門講座～デジタルライターのすすめ』総合電子出版社、2006年。

- 7) 鶴見俊輔資料、フォルダ名「S01_2045 北摂ベ平連」、立教大学共生社会センター所蔵。
- 8) 高石ともや [1941-2024] 北海道生まれ。立教大学在学時に、アルバイトのかたわらフォークソングを日本語に訳し歌い始める。1966年デビュー、京都を拠点に数々の音楽イベントに出演し、息の長い演奏活動を行った。
- 9) 「死んだ男の残したものは」、作詞が谷川俊太郎、作曲が武満徹。「ベトナム平和を願う市民の会」のために1965年に作られた。1967年の高石友也『思い出の赤いヤッケ』に収録された。
- 10) 「戦争の親玉」は、ボブ・ディランの「Masters of War」に高石ともやが日本語の歌詞をつけた曲である。岡林信康の『わたしを断罪せよ 岡林信康フォーク・アルバム第1集』に集録された。
- 11) 山本健治 [1943-] 大阪生まれ。関西ベ平連呼びかけ人、フリーライター。詳しくは『立命館平和研究』21号及び別冊2号の聞き取りを参照。
- 12) 木村満彦 [1942-2023] 中国大連生まれ。ハンパク協会事務局長。詳しくは『立命館平和研究』別冊2号の聞き取り調査を参照。
- 13) 日本共産党から離脱した春日庄次郎、山田六左衛門、安東仁兵衛らが1962年に結成。『平和と社会主義』を機関紙として、学生組織として社会主義学生戦線（フロント）も結成された。
- 14) 友部正人 [1950-] 東京生まれ。1960年代末に名古屋市から大阪市に移住し、フォークキャンプに参加。1972年に『大阪へやって来た』でデビューした。
- 15) 金森幸介（かなもりこうすけ）[1951-] 大阪府生まれのシンガーソングライター。1970年に小さなオルフェとしてデビューした。都会の村人やI.M.Oバンドに加入し、メンバーとして活動した。ソロアルバムとして『箱舟はさって』（1973年）、『少年』（1976年）をリリース、1980年代から服部緑地公園野外音楽堂でフリーコンサートを企画、ライブ活動を続ける。金森幸介オフィシャルサイト <https://www.kosuke-kanamori.com/> を参照。
- 16) いとうたかお [1951-] 静岡県生まれのシンガーソングライター。1971年から春一番コンサートに参加。1972年にデビュー。『いとうたかおファーストアルバム』（1974年）をはじめ、アルバムを継続的に出し、名古屋を拠点に活動している。著書として『小さな唄に手をひかれ』（2007年）がある。いとうたかおホームページ <https://itotakao.kustos.ac/> を参照。
- 17) 「肥った豚になるよりは痩せたソクラテスになれ」。1964年3月の東京大学の卒業式で東京大学総長の大河内一男の式辞として、新聞やテレビで大きく報道された。J・S・ミル『功利主義論』のからの引用であり現在では誤訳との指摘もあるが、当時の社会情勢のなかで広く受容された。
- 18) 春一番は、1971年から福岡風太らが中心になって、天王寺公園野外音楽堂でゴールデンウィークに開催したコンサート。